

文字離れ

近藤 朗

インフルエンザの予防接種に行つたときのことです。三歳くらいの男の子が一生懸命に本棚から本を選んでいきます。その横でよちよち歩きの女の赤ちやんが負けんじと本をあさります。やつとの思いで重い本を引き出しては床に落としてしまいお母さんに片づけられています。そんな微笑ましい様子を見ながら最近の自分について思いました。

本屋で読みたい本を探すときは、この兄妹の様に時間を忘れて夢中になるものです。ですが、この頃はすっかり本に親しむことがなくなりました。手書きで文章を書くことも少なくなり、漢字が出てこなくてハツとすることすらあります。辞書も引かなくなりました。

キーボードを叩いて変換すれば文章が整い、メールで即時に用件を伝えることができます。キーボードを押さなくとも音声認識で文章を整えることもできます。知りたいことがあれば、スマホが即座に情報を与えてくれます。行きたい所にはナビが親切丁寧に連れて行ってくれます。地図もいりません。便利な世の中になりました。いいことばかりです。

近所にいる三歳の子は、これまでおもちやの電車で夢中でした。ところが、おばあちゃんスマホに興味をもち、今や釘づけになっています。これからの時代、最先端の機器を自在に操作する能力は必要です。しかし、このような時代を生きる子どもたちにこそ本との触れ合いが必要だと考えます。

本来、子どもは本が好きなのです。本を読んでもらうのが本当に好きなのです。「本は心を育てる栄養」素敵な言葉です。本の重み、ページをめくり次のページに馳せる期待、残りのページの厚みで結末を予期する胸の高まり。デジタルの世界では味わえないアナログな感覚です。

新潟小学校では、十一月二十八日から十二月二日までを読書週間としています。図書委員会ではテーマを「昔話には面白さがいっぱい」と設定し、〇×クイズを行ってくれるようです。また、元アナウンサーの皆さんによる読み聞かせ、たんぼぼランチでの給食コラボメニューの企画もあるようです。

新潟小学校の子どもたちは、年間百冊以上の本を手を取っています。この素晴らしい読書の習慣を一生の宝としてもらいたいものです。